放送当番

昭和五十三年度　六年　女児

私は、後期の放送委員になった。当番の日は毎週火曜日だ。この間の火曜日の中間休みの時と放課後、こんなことがあった。

中間休み、いつもの通り調整室に行った。別に変わったこともないのだが、その日に限って、四十分授業のことを忘れていた。

「今日、何分でレコードやればいな。」

「いつもの通りだろ。」という話になったが、いざレコードを流そうとしたら、かねがなってしまった。

「あっ。今日四十分授業だけ。」

「そういえばんだけの。どうすっで。」

「どうすっで。」と言われても、もうかねはなってしまった。仕方がないので、レコードはやらないで、

「授業時間が始まりましたので、静かに教室に入って下さい。」と放送した。自分でも知らないうちに、はずかしい感じがした。教室に行くと、

「今日の放送当番なにしてんなんけ。」と言われた。

「なにがい。」と言い返したかったが、まちがってしまったのは私達だから仕方なかった。

放課後は、そうじをしなければならない。行くのはいやだが、今日は放送当番だ わざとおそく行った。でも、私が行った時は、そうじは終わっていた。みんなに悪いことしたかな、と思った。

下校時刻の時間になった。その時、みんなで笑わせ合っていたから、どうしても笑いが止まらない。話していると中、ふき出してしまった。下校時刻の音楽もみんな終わらせてから、みんなで、

「どうすっで。今日二回も失敗してしまったの。」

「うん、今日は、運いぐねあんの。」

「先生がら何か言わいっがもの。」などを話した。その時私は、やっぱりあの時行かなければよかった。と思った。が、ふまじめだと、先生から、

「六年だろ、最上級生だろ。」と言われそうな感じがしたので、その日は運が悪かっただけだ。と思うようにした。

戸じまりを確かめて、職員室にかぎを返して教室にもどったら、「やっと終わったか。」という感じでため息が出た。

今日の二時間めの終わりが、何分か確かめておけば、中間休みのような失敗がなかったのだし、放課後だって時間

は分かっていたのだから、五分くらい前にやめておけば、と中で笑わなくてもよかったのだ。こういうことは、協力しなければできない仕事だと考えさせられた。これからは、時間もきちんと確認して、協力しながら卒業までがんばっていきたいと思う。